

大学英語教育における 文学的教材の活用について

市橋孝道・岡村仁一（教育学部）・平野幸彦

はじめに

我々は2014年度から4年間にわたって、大学英語教育における文学的教材の可能性の探究をテーマに科学研究費(挑戦的萌芽研究)の助成を受け、特にオーセンティックな文学テキストとそのリトルド版との関係や、両者の教材としての効果の違いに焦点を合わせて考察を深めてきた。本稿は、著者3名が2016(平成28)年度にそれぞれ実施した試行授業の概要および結果の考察について報告するものである。

1

市橋は、イギリスの長編古典小説であるCharles Dickens (1812-1870)の *Great Expectations* (1860-61)を題材に、英語読解能力の向上と英文学全般に関する知識と理解の深化を目指した講読演習を実践した。演習の受講者は文系学部(「人文学部」)の3・4年生のうち、主として西洋文学(特に英米文学)を専攻する学生たち(前期18名、後期17名)であった。受講者は既に専門科目の基礎演習や基礎講義などを2年次に履修しているため、比較的高度な英文読解能力と英文学の基礎知識を身につけている。

最初に教材とその使い方について説明する。基本的に演習はOxford World's Classics版の原典に従って進め、必要に応じて最も信頼度の高いNonesuch版を適宜参照し、作品を詳説する際にはDavid Paroissienによる注釈書 *The Companion to Great Expectations* (2000)を活用した。演習は前期と後期それぞれ

15回ずつあるが、各学期の第1回目と8回目はガイダンスや補足解説（Oxford English Dictionary の引き方等）ならびに DVD 視聴のための時間として確保し、それ以外の各13回に、通年（両学期）を通して1つの作品を完読できるよう章やページ数を均等化して割り当てた。1回の演習で読みすすめる頁数はおよそ15～20ページ程度であった。DVD は、ブライアン・カーク監督による2011年のBBC 文芸ドラマ『大いなる遺産』を用い、講読した内容の復習であったり、媒体による表現の相違や内容の理解を深めたりした。有名な小説であるため、邦訳は数種類出版されているが、本演習では石塚裕子訳（岩波文庫）や山西英一訳（新潮文庫）のものを参照した。受講者には、予習段階で邦訳を参照することは認めているものの、演習日に訳本を教室に持ち込むことは認めていない。これは可能な限り英文に目を向けて思考させるためである。初回のガイダンスではこの他に『ディケンズ鑑賞大辞典』（南雲堂、2007年）やディケンズ・フェロウシップ日本支部のホームページ（<http://www.dickens.jp/>）が参考資料として有用であることを説明した。

次に、演習当日までの事前準備について触れておく。まず、各演習日には、講読箇所物語内容を紹介する発表者を1名か2名ずつ割り当てている。各学期を通して受講者は必ず1回この発表を担当し、講読箇所の要約と重要箇所の原文訳読ならびに注釈の解説をA4用紙両面1枚程度にまとめて発表する。発表担当以外の受講者たちも全員講読箇所を事前に精読することが求められている。その上で、初回講義において2つのグループ（AとB）に分けられた彼（女）らは、予習の段階で出てきた質問やコメントを「質問・コメント票」というフォームに記入して提出する役割とその質問・コメントをまとめた一覧表に対して自分なりの回答を用意し、演習当日にそれらを発表する役割とを一回毎に交替で担当していく。質問側を担当するグループは、「質問・コメント票（電子版）」という Excel で作られたフォームに「英語の質問」、「内容の質問」、「分析的コメント」の3種類のいずれかを最低3つ以上最大6つまで書き込んで、演習2日前の18時までにメールに添付して提出することが課題とされている。質問やコメントが一カ所に集中しないよう、各グループはさらに3つの小グループに分けられており、質問やコメントを出す箇所として講読箇所の序盤・中盤・

終盤をローテーションで割り当てられている。こうして Excel ファイルで寄せられた受講者からの「質問・コメント票」はその日（演習 2 日前）の夜 22 時までに Excel の一覧表に「質問・コメント一覧表」としてまとめられ、大学の連絡通知システムを通じて受講者全員に PDF ファイルで配信される。回答側のグループにはこの一覧表に掲載された「英語の質問」と「内容の質問」に対し、約 1 日半（約 36 時間程度）〈演習が午後に設定されているため〉の時間を使って演習日までに自分なりの回答を用意し、演習当日指名された際にその回答を発表することが課題とされている。本稿では例として 7 月のある演習用に配信した一覧表を投稿者の学年と氏名を伏せて提示する（【資料 1】）。

こうした事前準備のシステムにはいくつかのメリットが認められる。まず、受講者は邦訳のみでは解決できない問題に多々直面するため必ずテキストを精読する必要があるという点である。予習の段階で邦訳を参照することは認められているが、英語の原文と邦訳に違いがあったり、邦訳を参照しても解決できない英語の問題や難解な内容があったりするため、受講者たちは原文の英語をしっかりと読み込んで疑問点を挙げたり、その回答を用意する必要に迫られる。次に、受講者たちには事前準備で毎回、発表・質問・回答のいずれかの役割が必ず割り当てられているため、演習には受講者全員が参加しているという意識が根付いている点である。なお、物語の内容紹介をする発表者に関しては、その発表に集中できるようにするため、「質問・コメント票」の提出あるいはそれへの回答準備は免除している。但し、「英語の質問」に関しては、基本的に最もテキストを読み込んでいる内容紹介者が回答するというルールを敷いているが、時には他の受講者にも回答を求める場合もある。最後に、「質問・コメント一覧表」を事前に配信することにより、質問側グループには疑問だけでなくコメントも平等に発信できる機会が与えられるだけでなく、回答側グループは投稿された質問・疑問に対してじっくりと調査・考察する時間が与えられる点である。限られた演習時間のみでは、全員が意見を述べることが不可能である場合も多く、質問や疑問に対しても教室で必要な資料を十分に調べたり、指名直後にじっくりと考えを深め、まとめたりできない場合がある。実際、演習は質問事項への回答を中心に進めていくため、特に重要なコメント以外は各自

【資料】 質問・コメント類（電子版）一覧

Vol. 2, Ch. 9 & 10		質問・コメント類（電子版）一覧			投稿者
通番	頁	行	内容の種類	質問・コメント内容	
1	206	12	内容の質問	"All other swindlers upon earth are nothing to the selfswindlers, and with such pretences did I cheat myself." とはどういうことか。	〇年 〇〇
2		15-21	内容の質問	"but that I should knowingly reckon the spurious coin of my own make, as good money!" におけるmoneyとは、具体的に何を示しているのか。	〇年 〇〇
3		27-28	内容の質問	Trabb's boy might...tell him thingsとあるが、なぜPipにとってこうなることは都合が悪いのか。	〇年 〇〇
4	207	15	内容の質問	Pipは、囚人たちに対してどのように思っているのだろうか。P. 208に描かれる紳士のように、不快に思っていないのだろうか。	〇年 〇〇
5		29	内容の質問	"...appeared as a matter of course, ..." の部分について、一方の囚人の服が小さいことが当然のことであると考えたのはなぜか。	〇年 〇〇
6	208	30	英語の質問	"if I'd a had my way" とはどういうことか。	〇年 〇〇
7		31	内容の質問	Pipが"As I really think I should have liked to do myself, if I had been in their place and so despised." と思ったのはなぜか。	〇年 〇〇
8	209	1	分析的コメント	HerbertがPipをHendelという愛称で呼んでいたことで、普酒場で出会った囚人に自分がthat boy = Pipであることが悟られずに済んでいる。大きな運命の力の中に主人公Pipが組み込まれており、物語の謎が徐々に真相へと近づきつつあることが感じられる。	〇年 〇〇
9		16-17	英語の質問	"In the act of dipping forward as if I were going to bathe among the horse" のdipping forwardとas以下の箇所はどのような意味か。	〇年 〇〇
10	210	9-10	内容の質問	Mudbank, mist, swamp, and workを順番を入れ替えて繰り返しているのには何かわけがあるのか。	〇年 〇〇
11		31	内容の質問	the wicked Noah's Arkとはどういう意味か。	〇年 〇〇
12	211	9-25	内容の質問	この新聞記事の内容とそれに対するPipのコメントはつまりどういう意味なのかわからない。また、なぜ給仕はこの記事を置いたのか。	〇年 〇〇
13		23-27	内容の質問	I entertain a conviction, ~ the founder of my fortunes. とはどういうことか。	〇年 〇〇
14		24	分析的コメント	Esquimaux or civilised manとあり、当時の差別意識が表れている。	〇年 〇〇
15	212	13	内容の質問	I mention this in this place, ...とはどういうことか。なぜ語り手のPipがここで介入したのか。	〇年 〇〇
16		25	内容の質問	When I had rung at the bell with an unsteady hand, とあるが、なぜベルを鳴らすとき手が震えたのか。	〇年 〇〇
17	213	2	分析的コメント	OrlickはPipの質問にきちんと答えず、からかうような返事を繰り返している。Pipの境遇が変わっても、Pipを見下すような態度は変わっていないことがうかがえる。	〇年 〇〇
18		6	内容の質問	I was not so sure of that. とあるが、PipがOrlickの答えに対してこのように思ったのはなぜか。	〇年 〇〇
19		25	内容の質問	Orlickを"dormouse"に例えた意図は何か。	〇年 〇〇
20	214	9-11	内容の質問	Sarah Pocketが緑や黄色になったとはどういうことか。	〇年 〇〇
21	214-215	36-4	分析的コメント	Estellaを見る前は少年時代よりも軽い靴を履き、自分は大きく変貌を遂げているとPipは思っていたが、逆に自分が粗野で下品になりがっているのではないかと思うくらいEstellaの変貌ぶりであることがうかがえる。	〇年 〇〇
22	217	26-36	英語の質問	PipがEstellaから受けた印象はどのようなものだったと考えられるか。	〇年 〇〇
23	221	5	内容の質問	Pipは何故Estellaに会ったことが無いと言ったのか。	〇年 〇〇
24		13	内容の質問	ここでのPipの質問にはどんな意図が込められているのか。	〇年 〇〇
25		13	内容の質問	なぜPipはEstellaの姓を気にするのか。	〇年 〇〇
26		26-29	内容の質問	Mr. Jaggersが食事中Estellaを見なかったのはなぜか。	〇年 〇〇
27	222	32	英語の質問	wash his hands of herとはどういうことか。	〇年 〇〇

で熟読しておくよう促す程度にとどめざるを得ない場合もある。以上を考慮すると、「質問・コメント一覧表」には受講者の理解度や疑問点ならびに興味・関心が集約されており、この表に記載された質問事項を検討していくことで演習は受講者の知的好奇心を満たし、かつ刺激する内容を提供している。

では、講読演習それ自体の進め方を明らかにする。演習はまず、1人または2人の発表者が講読箇所のお話内容をハンドアウトに従って解説する。発表時間は1人約10分程度と決めており、先述のとおりこの時間内に物語の粗筋、重要箇所の原文訳読、注釈についての説明を行う。発表は可能な限り上級学年か発表経験者の学生から割り当て、未経験者が手本として参考にできるよう配慮されている。次に「質問・コメント一覧表」に掲載された「内容の質問」と「英語の質問」について、それぞれ発表者や回答グループの学生を指名し、各自が用意してきた回答を尋ねていく。質問する際には教員が色分けや語義などのコメントを付したテキストのPDFファイルをスライドに投影し、受講者全員が頁数や行数を瞬時に把握できるよう配慮している。加えて「質問・コメント一覧表」には、頁数と行数の昇順で質問やコメントに通番が付され並べられているため、回答を尋ねる際には、物語の内容や文脈についての補足説明を交えながら質問を読み上げていく。一覧表に掲載された質問については、教員側も事前に回答を用意しており、回答者がほぼ適切な答弁をしていたり、正しい解釈を発表したりした際には、それらを尊重し次の質問へと進む。これとは逆に、質問に対する回答が明らかに間違っていたり、説明や考えが不十分であったりする場合には教員側から補足解説やコメントを付け加えていく。一覧表に掲載された質問の中には、質問の意図が不明瞭である場合や英文内容を十分に理解できていない場合もある。その際には、質問者に投稿した質問について更なる説明を求める時もある。また、「分析的コメント」が「内容の質問」に対する適切な回答となっている場合や、言及に値する優れたコメントである場合はそれらを積極的に高く評価し、参考となる旨を告げる。

【資料1】は *Great Expectations* の第2巻9章と10章を講読した際の「質問・コメント一覧表」である。投稿された内容を見てみると「英語の質問」が4件(通番6, 9, 22, 27), 「分析的コメント」も4件(通番8, 14, 17, 21)あり、そ

れ以外の19件が「内容の質問」であることが分かる。ここから、英語の文法や語彙に関する疑問は比較的少なく、受講者たちはほぼ原書の英語を理解できていると考えられる。問題は英語の語彙や文法・意味を捉えた上で、それらが一体何を意図・表現しているのかということに多くの疑問が寄せられている点である。第9章は London で紳士としての生活を送っていた主人公 Pip が久しぶりに貧しい幼少時代を過ごした故郷に戻る場面を描いている。冒頭では、語り手としての Pip が、当時自分が幼少時に育てられた姉の家には宿泊せず、いろいろと自分なりの理由をつけて外の宿屋に泊まったことを後悔している。この自責の念は、幼少時に姉の夫である Joe Gargery から優しく接してもらったことへの忘恩だという意識に起因している。通番1と2の質問は、英語の文法構造や日本語訳を問うているのではなく、そこに書かれた Pip の語りが一体何を表現しているのかを問題にしている。このため、ここには自分で自分を騙して Joe のいる姉の家に宿泊しなかった当時の自分に対する語り手 Pip の自己嫌悪が強烈に表現されていることを理解する必要がある。Pip はこうした状況を直後に例え話で分かりやすく言い換えている。つまり、他人から渡された贋金をそれとは知らずに使うほうが、自分で造った贋金を本物のお金(“good money”)だと思いつくことよりはるかに善良である、ということである。このため、ここでの“good money”とは、Pip が姉の家に宿泊しない「正当な理由」を暗示していると解釈できよう。彼は自分ででっち上げた宿泊できない理由を自分で造った贋金(“the spurious coin of my own make”)に例え、それがあたかも本物のお金(“good money” = 正当な理由)であるかのように自身を欺き言い聞かせたのである。通番11や20の質問に対する答えを用意するためには、回答側グループの受講者たちが旧約聖書の創世記を調べて内容を理解する必要があったり、“green”や“yellow”という色がもつ象徴的意味(嫉妬心)を、辞書や参考資料を丹念に調べて知る必要があったりする。演習ではこうしたテキストの読み込みを、受講者たちに質疑応答をさせあうことで、退屈にならず深めていくことが可能なのである。

こうした演習の運営により、質問側グループには各自が抱いた疑問が解消されていく満足感が漂い、回答側にも自身の用意した回答が適切か否かという好

奇心が満たされ、熟慮された回答を発表出来た場合はある程度の達成感も得られるようである。また、受講者たちには同じ受講者目線のコメントや発表の方が理解し易い場合があったり、優れた発表や質問・コメントを競い合っ出ていこうとする姿勢が見られたりする。1年分の「質問・コメント一覧表」を見返してみると、演習開始当初は「英語の質問」や「内容の質問」の数が比較的多いのに対し、終盤ではそれらの数が減少し、優れた「分析的コメント」の数が増加していることが分かる。これは、受講者たちが毎回演習に出席し、英文読解能力を少しずつ高め、作品の内容理解を深めていることを裏付けているだけでなく、作品の解釈や批評能力をも培っていると考えられよう。一つのイギリス長編小説を毎回上述した形式で精読することは大変骨の折れることではあるが、様々な観点から少しずつ継続して作品に接することで、受講者たちは退屈な反復作業のみを強制されることなく、お互いの考えや能力を尊重しながら高めあえているのである。

こうした実情は各学期の終わりに実施した授業評価アンケートによっても裏付けられる。まず、「この授業を受講して総合的に満足している」の項目は「非常にあてはまる」が前期80%・後期75%、「ややあてはまる」が前期20%・後期25%であり、いずれも受講者たちに高い満足度が得られていることが分かる。次に、「教員は、学生の発言を促し積極的に参加する工夫をした」の項目では「非常に当てはまる」が前期87.5%・後期91.7%、「ややあてはまる」が前期12.5%・後期8.3%となっており、共創的演習形態が受講者たちにも理解され、様々な形の発言（発信）機会が設けられていることが積極的参加への意識や意欲につながっていることが確認できよう。もう一点見ておきたいのが「この授業は、自分で考え学習する力をつける助けになった」という重要な項目である。これには「非常に当てはまる」が前期81.3%・後期76.9%、「ややあてはまる」が前期18.8%・後期15.4%となっており、本演習によって受講者自らが学習し、思考を深める契機となっていたことが分かる。これは演習を通して、受講者同士がお互いを刺激し、高い意欲や動機を保持していたことを窺わせる。受講者たちには、テキストの精読だけでなく、発表準備や「質問・コメント票」の提出、そして質問への回答準備など毎回負担の大きい課題が課されているが、こ

れらは決して意欲の喪失にはつながっておらず、むしろ肯定的に理解されていることも見ておきたい。「教員は、課題を課すなど、学生自身が学習を進めるようサポートをした」という項目は「非常に当てはまる」が前期81.3%・後期91.7%、「やや当てはまる」が前期18.8%・後期8.3%となっているからである。

これまでに見たイギリス長編小説を読み解く共創的講読演習が、実社会で有用とされる迅速で正確な英文読解能力の向上に貢献できる部分は残念ながら僅かとしか言いようがない。受講者の英語運用能力を図る指標として、本研究プロジェクトではVELCテスト（Visualizing English Language Competency Test）を前期（5月）と後期（翌年1月）に実施した。その結果、比較可能であったデータは14名分あり、そのうちの10名が2回目のテストでより高いスコアをあげている。しかし、その10名中リーディングのスコアを伸ばしたのはわずか3名のみであった。このため、全体的には平均スコアが20近く上がっているものの、これはリスニングのスコア上昇によるところが大きいと考えられる。これらは受講者たちが講読演習以外に数か月にわたって様々な形で英語に接してきた成果であるとも読めるであろう。イギリスの長編小説を修辞技法や文学的表現・背景知識などを踏まえ適切に精読・解釈していくことが、速く正確に英語の文章を読み取る英文読解力を向上させることにどれほど貢献できるかを証明することは難しい。しかし、本演習が受講者たちに英語に接する機会を与え、半ば強制的にでも根気よく英文と向き合う時間をつくっていることは間違いないであろう。1年を通じて1つの名作と呼ばれるイギリス小説を様々な角度から精読し、受講者同士で切磋琢磨しながら身につけた知識や、作品の評釈能力、調査力や思考力、意見の発信能力は客観的指標では数値化できない。それらは可視化出来ない立証不能な力かもしれないが、確実に受講者たちが有し高めあうことのできた極めて重要な能力なのである。最後に、本演習を履修し、熱心に参加・貢献してくれた受講者にあつく御礼を申し上げる。

引用文献

Dickens, Charles. *Great Expectations*. 1860-61. Oxford: Oxford UP, 2008.

(以上、市橋孝道)

2

英語のリーディング教材を用いた授業ではどのような点に着眼して授業を進めるべきか、平成28年度岡村が担当した新潟大学教育学部の授業科目、「英語教育リーディング演習Ⅲ」及び「英語教育リーディング演習Ⅳ」を通して考察を進めた。文学作品を解釈するというよりむしろ、英語のリーディング力を養うことを主だった目的とする授業であるため、テキストはオリジナルを用いずに標準的な現代英語で書き換えられたリトルド版を用いることとした。授業では

- (1) American English と British English の違いを認識する。
- (2) 中高生に教える立場から、基本語の意味、文法事項等を再確認する。
- (3) 英語の度量衡に慣れる。
- (4) authentic text としてオリジナルのテキストも参照し、生きた英語を学ぶ。
- (5) 文学的解釈を試みる。

という5点に留意したが、(1)~(3)については主に「英語教育リーディング演習Ⅲ」で実践し、その考察は拙著「教員養成学部の英語教育専修における英語コミュニケーション科目のあり方について」(共著)の中で論じたため、本論では主に「英語教育リーディング演習Ⅳ」で実践した(4)、(5)の2点に絞って論を進めたい。テキストには

Herman Melville, *Moby Dick*. Retold by John Escott. (2008) (Macmillan Readers : Level 6)

を使用した。テキストの難易度は 1 : Starter 2 : Beginner 3 : Elementary 4 : Pre-intermediate 5 : Intermediate 6 : Upper の6段階中最上位に位置する。

テキストの内容は登場人物、作品の舞台となる Pequod 号の進路、航海途中出会う船等オリジナルのテキストに沿ってはいるものの、*Moby-Dick* の創作過程を研究した Stewart によると現 *Moby-Dick* 完成の1年前に一旦完成していたという「原『白

鯨』(Ur-Moby-Dick)』(417)の特徴である「単なる捕鯨航海 (a mere whaling voyage)』(446)に近いもので、*Moby-Dick*を世界文学の傑作たらしめている Moby Dick の「白さ (whiteness)」についての考察やAhab船長が Moby Dick に向ける「偏執狂的 (monomaniac)」執念といった要素に欠けている。これらの要素は、これまた *Moby-Dick* の創作過程を研究した Barbour によると、「Shakespeare や Hawthorne の影響を受けて (under the influence of Shakespeare and Hawthorne)』(345)「初期の物語 (即ち Stewart 言うところの Ur-Moby-Dick)』を現 *Moby-Dick* へと書き換えていく作業の中で付与されたものと考えられており、その副産物として作品内に残る数々の矛盾点もこれまた作品の味として捨てがたい魅力を保っている。そのような箇所をオリジナルのテキストから抜き出して吟味してみる時間も一部設けて授業に取り組んでみた。例えば“Moby Dick”というタイトルが付いている Chapter 41では “. . . it cannot be much matter of surprise that some whalers should go still further in their superstition; declaring Moby Dick not only ubiquitous, but immortal (for immortality is but ubiquity in time) . . .” (183)といった表現により Moby Dick の特性が説明されている。

引用文献

岡村仁一、加藤茂夫、成田圭市、Carmen Hannah、本間伸輔、松沢伸二「教員養成学部の英語教育専修における英語コミュニケーション科目のあり方について」『新潟大学教育学部研究紀要』第9巻第2号、人文・社会科学編、2017年3月 (pp. 217-237)。本人担当箇所はセクション7「英語教育リーディング演習Ⅲ、Ⅳ」(pp. 233-236)。

Barbour, James. “The Composition of *Moby-Dick*.” *American Literature*, Vol. 47, No. 3 (1975): 343-360.

Melville, Herman. *Moby-Dick or The Whale*. Vol. 6 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of Herman Melville*. Ed. Harrison Hayford et al. Evanston & Chicago: Northwestern Univ. Press & Newberry Library, 1988.

Stewart, George R. “The Two *Moby-Dicks*.” *American Literature*, XXV (1954): 417-448.
(以上、岡村仁一)

3

平野は第1学期および第2学期の人文学部発展演習（3，4年生対象）授業科目「英米言語文化演習」を通して試行授業を行った。授業計画としては、まず(1)一般に小説テクストを読解する際に着目すべきポイントを確認したうえで、(2)オーセンティックな文学テクストとそれを元に作られたリトールド版を適宜読み比べさせるという方法を採用した。

中心となるアクティビティーを行う前提として、小説（本試行授業では長篇／短篇の別にはこだわらなかった）テクストを読む際のポイントを学生に理解させるために、廣野由美子『批評理論入門』の「I 小説技法篇」を予習として各自通読させ、授業中には項目ごとに講義・質疑応答を行った⁽¹⁾。

そのうえで、(1) Edgar Allan Poe, “The Tell-Tale Heart”, (2) 同, “The Fall of the House of Usher”, (3) 同, “William Wilson”, (4) Herman Melville, *Moby-Dick* の4作品を取り上げ、オーセンティックな文学テクスト（以下「オリジナル版」と記す）とリトールド版の読み比べをさせた。その際、(1)はオリジナル版のみ、(2)と(3)はリトールド版からオリジナル版の順に、(4)はリトールド版全体を読ませた後、オリジナル版の一部（前者の第1章に該当する部分）を課題とした⁽²⁾。具体的な学習方法としては、各自でテクストを読ませて、上記小説を読む際のポイントに即して分析してきてもらう（ペーパーにまとめて提出）というやり方採った。

本シラバスの主たる思惑は、オリジナル版での再読において、リトールド版には見出せなかった詳しい記述・描写や、レベルの高い語彙や構文を避けたがために生じたニュアンスの違いなどに自ら気づかせられるのではないかと、いうものだったが、事後の学生による授業評価アンケートを見ると、それもある程度実現できた模様だが、その他に、リトールド版であらかじめ作品の概要を把握しておいたことが、より難しいオリジナル版の理解に役立つという効用もあったようである。

また、同じく授業評価アンケートから受けた印象であるが、もともと文学に対する関心が比較的高い学生が対象だったとはいえ、文学的教材に対する日本の大学生の反応は思ったより悪くなさそうである。オリジナル版にはオリジナル版、リトールド版にはリトールド版ならではの、外国語教材としての長所／短所がある⁽³⁾ので、両者を組み合わせたり、文字テクスト以外のメディアの助けを借りたりして工夫を凝らせば、文学的教材の可能性はさらに開けるだろう。むしろ、 Semester（半期）制どころかクォーター（四半期）制を採用したり、なにがなんでも90分×15ないし16回の授業回数にこだわるといった融通の利かない学修制度設計のほうに、より克

服しがたい困難が存在するのではないかといった思いを抱かずにはいられなかった。

註

- ⁽¹⁾ 項目は次のとおり:冒頭, ストーリーとプロット, 語り手, 焦点化, 提示と叙述, 時間, 性格描写, アイロニー, 声, イメジャリー, 反復, 異化, 間テキスト性, メタフィクション, 結末
- ⁽²⁾ Poe の作品のオリジナル版は The Edgar Allan Poe Society of Baltimore のウェブサイト (<https://www.eapoe.org/>) から各自入手させた。同じくリトル版は, (2)と(3)は Penguin Readers の Level 5, (4)は同じく Penguin Readers の Level 2 を用いた(学生のレベルを考えると本当は Macmillan Readers の Level 6 を用いたかったのだが, 授業実施当時は入手困難だった。このように洋書を教材に用いる場合は, 入手可能性が大きな問題となりうる)。
- ⁽³⁾ オリジナル版はオーセンティシティー(真正さ, 本物であること)というかけがえのないメリットがある一方, 英語を外国語とする日本の大学生にとっては多かれ少なかれハードルが高いことは否めない。それに対しリトル版は, 語彙や構文の点で学習者のレベルに合った教材を選べるので取っつきが良く, 自学自習教材としても使うことができる一方, とりわけ低いレベルのものだと大学生の知的興味や関心を満足させられないおそれがある(長篇作品の場合, 分量の圧縮度がより高くなるので, この弱点はさらに顕著になる傾向がある)と思われる。

引用文献

廣野由美子『批評理論入門——『フランケンシュタイン』解剖講義』中央公論新社, 2005年

Melville, Herman. *Moby-Dick*. Retold by Kathy Burke. Harlow, Essex: Pearson Education, 2008.

Poe, Edgar Allan Poe. *Tales of Mystery and Imagination*. Retold by Roland John. Harlow, Essex: Pearson Education, 2008.

(以上, 平野幸彦)

※本研究は JSPS 科研費 26580108 の助成を受けたものです。